

二〇一九年度 卒業論文

現代社会における寺院・僧侶のあり方

過疎地域を中心に

コピー 厳禁

L160105

本郷
法

目次

序論	1
本論	2
第一章 寺院をとりまく環境	2
第一節 社会的要因	3
第二節 寺院内の要因	5
第三節 人口減少と過疎化	6
第四節 過疎地域における寺院	8
第二章 過疎に立ち向かう寺院と地域	10
第一節 信頼	10
第二節 信頼を生む「共にする」活動	12
第三節 宗教の必要性と僧侶のあり方	16
第三章 寺院解散・寺院合併となった時	18
第一節 廃寺がもたらすもの	19
第二節 心の過疎を生まないために	21
結論	23

著作権 禁

註
参考文献

コピー厳禁

序論

私は、浄土真宗の寺院に生まれ、仏教や親鸞聖人の教えに興味があり、龍谷大学を受験した。大学進学まで宗門校に通ったことはなく、寺族の友人も周りにいなかったため、他の寺院がどのような様子かというのはほとんど知らなかった。

龍谷大学に入学して、寺院がおかれている状況はそれぞれによって大きく異なるということを感じた。多くのご門徒の方がおられる寺院もあれば、経済的に苦しく、合併や廃寺を考えている寺院もあることを知った。また、僧侶や寺院に厳しい目が向けられていることも痛感した。真宗学科でも寺族出身でない学生は多く在籍しているが、このような寺族出身でない方からみれば、僧侶や寺院はまだまだ恵まれていて豊かな暮らしをしている、と思われていること、僧侶や寺院が社会の期待に応えきれないということに気づかされた。

僧侶は何不自由なく生活している、という認識が社会にはまだまだあるようだが、私の実家の寺院も過疎高齢の地域にあり、これまで寺院を護持してくださっていた方もお浄土へ往生されている。今、寺院を支えてくださっている方がいなくなったら、いったいどうなるのだろうかと不安になることがある。ご先祖の方々が建立され、今まで育てていただいた寺院がなくなってしまうかもしれないことを考えると、非常につらく、寂しい気持ちになる。

僧侶を題材としたテレビ番組が放送されたり、坊主バーが人気を集めたりと、世の中から仏教が全く求められていないわけではないと感じる。現代社会に僧侶、寺院が必要とされ、特に過疎地域の寺院が残っていくために

はどうしたらよいか、仏教や浄土真宗が過去の教えではなく、現代社会に生きる私たちのよりどころになるとうことを証明したい。また、廃寺にするしか選択肢がなくなってしまうとき、廃寺の手続きを行う人や門徒の方々の不安、負担をどう取り除くかということも考えたい。

本論第一章では、厳しい状態におかれている寺院をとりまく環境とその要因、過疎地域における寺院運営の問題点についてみていきたい。第二章では、過疎地域において寺院や地域社会を盛り上げるために活動している事例をあげ、寺院や地域社会を盛り上げるためにはどのような要因が必要で、寺院と寺族には何が求められているのかを考える。第三章では、寺院解散、寺院合併が起きた際に生じる問題を廃寺の例をもとに考え、どのようにして地域社会や門徒の不安を取り除いていくのか、寺院と地域社会との信頼関係を継続させていくにはどのようなしていくのか考える。

本論

第一章 寺院をとりまく環境

近年、寺院をとりまく環境が大きく変化し、寺院は厳しい運営状況におかれている。鵜飼秀徳氏の著書『寺院消滅』によると、寺院は次のような状態であると述べられている。

現在、全国に約七万七〇〇〇の寺院がある。そのうち住職がいない無住寺院は約二万カ寺に達している。さらに宗教活動を中止した不活動寺院は二〇〇〇カ寺以上にも上ると推定される。無住寺院とはつまり空き寺のことであり、放置すれば伽藍の崩壊や、犯罪を誘引するリスクがある。¹

実際に二万もの空き寺、二〇〇〇の宗教活動を行っていない寺院があることは大変残念なことであり、今後これらの数字が増加していくであろう。そして鶴飼氏の指摘するように、無住寺院が放置され、伽藍の崩壊や犯罪を誘引するリスクもあることから、地域社会そのものが荒廃していくことも懸念される。ではなぜ、寺院が厳しい運営状況におかれているのだろうか。それは、大きく分けて「社会的要因」と「寺院内の要因」の二つの要因が影響していると考えられる。

第一節 社会的要因

まず、社会的要因について二点見ていきたい。一点目は、貧困、経済格差の問題の影響が考えられる。寺院を護持、運営する門信徒の方の生活は、きわめて苦しい状況に置かれている。日本の子どもの七人に一人は「相対的貧困（すべての人の所得を高い順から低い順に並べたとき、ちょうど真ん中の人の所得の半分以下のお金で生活している状態）」であるといわれている。

また、二〇一四年の国税庁の報告では、非正規雇用の進展に伴い、年収二〇〇万円以下の「ワーキングプア」とよばれる人々が二四・〇%いることが明らかになっている。²このような厳しい社会情勢において、寺院への

懇志、布施は重大な経済的負担であると考えられるのである。

第二節でとりあげるエンディング産業展での調査で示されたような、不適切な態度をとる僧侶からの要請は、なお一層苦痛であると推察される。新しい葬送儀礼の形態として、僧侶など宗教的要素をなくした「家族葬」、病院から直接火葬場へ向かう「直葬」などが注目されているが、葬儀のあり方の変化には、僧侶の日常生活における態度、法要儀式に臨む姿勢だけではなく、多くの世帯においてしだいに経済的余裕がなくなっていることが関連していると推測される。

二点目に、家族形態の変化が寺院のあり方に影響を与えていることが考えられる。江戸時代の寺壇制度によって、各世帯は必ずいずれかの寺院に所属することが定められ、制度の廃止後も、家の中で仏教は受け継がれてきた。しかし、二〇一五年の国勢調査では、一世帯あたりの人数が二・三八人と、核家族化が進行していることが明らかにになった。³ この調査の結果から、祖父母、両親が寺院に参拝したり、お仏壇の前で手を合わせたりといった姿を見て仏教が次の世代に伝わる、ということは日本の現代社会ではしだいに困難になっていきつつあると考えられるのである。

過疎地域では、雇用がない、十分な収入が得られないといった理由で、若者が進学、就職を機に帰ってこず、今寺院を支えている方々がいなくなったとき、寺院のみならず地域社会が危機的な状態を迎えると推察される。しばしば、「お寺に若い人が来ない」という意見を耳にするが、仕事が忙しいのだから当然であり、家の中での仏教の継承が難しい時代だからこそ、時間的、精神的に苦しい中でも仏教、寺院に関心を持ってもらえるような

工夫が必要と考えられる。

第二節 寺院内の要因

次に、寺院内の要因である。僧侶や寺院のあり方が寺院の活動に悪影響を及ぼしていることが考えられる。二〇一七年に、エンディング産業展において浄土真宗本願寺派総合研究所が行った「仏教・お寺・お坊さんの印象について」のアンケート調査では、僧侶に悪い印象を与える要因として「人に対する態度」（二二・八％）、「金銭感覚」（一八・五％）、「法話の力量不足」（一三・〇％）などの回答がみられた。特に、「人に対する態度」については、具体的には「上から目線」「お坊様の言動」「人格的に尊敬できない」「近づきがたい」「社会性、社会常識、マナー」の欠如⁴といった意見があげられ、僧侶の態度が周囲の人々に不快感、不信感を与えていることが示唆された。

また、寺院に悪い印象を与える要因で最も多かったのは「懇志（布施を含む）の額」（三六・七％）であり、寺院を護持していくための懇志、布施が大きな負担となっていることが示された。以上のことから、僧侶、寺院が社会の期待に応えられていないこと、こうした僧侶の態度が寺院を地域社会から孤立させ、遠ざけていることが推測される。

また、宗門が無住寺院や不活動寺院となってしまう寺院の実態の把握やこれに対する対策を進めることができていないことも要因としてあげられる。この件に関して鶴飼氏は次のように述べている。

一部、規模の大きな教団ではサンプル調査に乗り出してはいるものの、仏教界全体ではほぼ手つかずの状態と言える。ましてや、この状況から脱するがための対策には乗り出せてはいない。末端の各寺院はそれぞれが宗教学人格を有している以上、宗門本部がカネを投入したり、整理・統合を進めることが難しい。寺を存続させるかどうかは住職の判断に委ねられている。⁵

鵜飼氏の述べたように、宗門本部が直接的な支援をすることは難しく、寺院の存続については住職の判断となるだろう。

しかし、これでは無住・不活動の問題を抱えている寺院の住職や寺族、門信徒の負担が大きいのではないかと考える。組織運営や金銭的な問題に対して有効な対策を打つことができるノウハウをもった人物を宗門本部から派遣することができれば良いのであろうが、先述したように宗門本部からの直接的な支援は難しい。また、そのような人物が寺族や門信徒のなかにいれば良いのが、これも現実的ではないように感じる。

第三節 人口減少と過疎化

さらに社会的要因である人口面の要素を加え、本論文のテーマである過疎地域について見ていく。まず、日本の人口についてであるが、総務省統計局が二〇一九年十一月二十日に公表したデータによると、総人口は一億二六二五万二千人、一五歳未満人口は一五二八万七千人、一五〜六四歳人口は七五一七万八千人、六五歳以上人口は三五七八万六千人となっている。⁶ 一五歳未満の人口の割合が約一二・一%、一五〜六四歳人口の割合が約五

九・五％、六五歳以上の人口の割合は約二八・三％となっている。

十年前の二〇〇九年の人口と比較をしてみよう。これについても先ほどと同じく総務省統計局が公表したデータによると、総人口は一億二七五一人、一五歳未満人口は一七〇一万人、一五〜六四歳人口は八一四万三千人、六五歳以上人口は二九〇〇万七千人となっているのである。⁷ 現代の日本はまさに人口減少社会・少子高齢社会であるといえるであろう。そういった状況の中で、寺院や地域社会を支えていく年代や仏教を継承していく年代が減少していることは明確であり、寺院活動や地域社会の活性化、仏教の継承に大きな影響を与えていることが推測される。

次に、過疎化についてである。そもそも過疎とは、「極度にまばらなこと。特に、ある地域の人口が他に流出して少なすぎること」⁸ であり、総務省地域力創造グループ過疎対策室が二〇一六年七月に公表した「過疎地域・過疎対策の状況」によると、日本全国の市町村数一七一八地域のうち過疎関係市町村数は七九七地域にも上る。⁹ 神奈川県を除く四六都道府県に過疎関係市町村があり、東京都や千葉県、大阪府といった首都圏や関西圏においても少数ではあるが過疎関係市町村があることには大変驚くデータであり、過疎化は日本全体の問題と言えるのではないだろうか。

このような過疎地域において、公共施設の整備水準が全国と差があること、財政面で厳しいことが問題である。また、先ほど取り上げた、人口減少社会・少子高齢社会を併せて考えてみても、農林業や水産業の衰退、生活交通の不足、地域医療の危機、そしてその地域の維持そのものが危ぶまれていることも問題点としてあげられるだ

ろう。

第四節 過疎地域における寺院の現状

これまで述べてきた厳しい寺院運営となつてきている要因を念頭において、今回は浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派）の状況を一例として過疎地域における寺院の現状について詳しく見ていきたい。

二〇〇九年に本願寺派が行つた「第九回宗勢調査」によると、本願寺派寺院の所在地は、「市街地」にある寺院が一七％、「住宅地」が二八・四％、「農山漁村」が五四・六％となつていゝる。¹⁰つまり、本願寺派寺院の半数以上が農村・山村・漁村に位置しており、農山漁村に所在する寺院の七六・一％が過疎地域にあるという回答があつた。¹¹しかし、浄土真宗本願寺派総合研究所教団総合研究室に所属する那須公昭氏が総務省指定の過疎市町村に所在する寺院から本願寺派寺院の所在について調査すると、実際に過疎市町村に所在していた本願寺派寺院は二三・八％であり、那須氏は次のように述べていゝる。¹²

宗勢調査はあくまでも意識調査であるので回答者の主観が強くなりがちであるが、寺院所在地を過疎地域であると自覚している、もしくは総務省が把握していない過疎地域に所在していると見ている回答者が多いのではないか。¹³

つまり、僧侶は過疎に対する問題意識を持つていゝると考えられ、寺院の存続が危ぶまれていることを常々感じているのではないだろうか。

そして、熊本大学名誉教授の徳野貞雄氏は、中国新聞社文化部記者の桜井邦彦氏からの「農村部のお寺が活気を失ってきている理由は？」という問いに対して次のように答えている。

「農村のお寺が衰退しているのは、一九六〇年代から進んできた大きな社会の変化にお寺が適応できていないからだろう。産業化、少産化、長寿化が社会の中で並行的に進んできた。若い労働力は都市部へ移動した」

¹⁴「一九六〇年代までの農村は貨幣経済に依存しない自給生活が成り立ち、講を中心にお寺を支えてきた。

仕事も家族も地域に土着していた。みんな歩いて移動した。だが今は、車社会。家族は広域に広がり、子や孫は近隣市町で暮らす。世帯が分かれた家も多い。葬式も家族葬が増え、様変わりした」¹⁵

伝統や昔ながらのものに目を向け、守っていくこと、継続させていくことはもちろん大事なことだと思う。しかし、そればかりに目を向けていては考え方や価値観を変えることができず、徳野氏の言うように社会の変化に適応できなくなり、寺院が衰退する一方である。絶えず社会の変化に目を向け、考え方や価値観を日々更新し、行動を起こしていくことが必要である。

以上のような、社会的要因や寺院内の要因から寺院は厳しい状態におかれている。特に過疎地域は少子高齢化が著しいことに加え、進学する学校や働く職場が限定されるという理由から、学生や働き世代が地元を離れることは珍しくない。さらには、核家族化も進んでいることから家族内での仏教の継承が難しくなってきていることから、お寺に訪れる人や仏教に関心のある人は、かなり限られているのではないかと推察される。そして、このまま少子高齢化や過疎化が進行していけば、地域社会が廃れていくことになる。寺院運営は、門信徒との信頼関

係、協力関係はもちろんであるが、地域社会とも同様な関係性のもとで成り立っているものである。つまり、地域社会が廃れていくことは寺院も廃れていくことと同義であると言える。これを防ぐためにも、僧侶は社会の変化に目を向け、行動を起こしていかななくてはならない。

第二章 過疎に立ち向かう寺院と地域

では、寺院が中心となり地域社会を巻き込んで、この状況に立ち向かうことは出来ないのだろうか。前章では、寺院が厳しい状況に置かれている原因について、社会的要因、寺院内の要因から見えてきた。さらに、過疎地域においての問題点についてうかがってきた。

本章では、現代日本の社会情勢のなかで寺院運営を行っている過疎地域の僧侶や門信徒、寺院についてとりあげ、そこから寺院や地域社会を活性化させるためにはどのような要素が必要か、寺院や寺族には何が求められているのか考えていきたい。

第一節 信頼

第一章でも述べたように、寺院運営は、門信徒との信頼関係、協力関係はもちろんであるが、地域社会とも同様な関係をもつことで成り立っているものである。ではこの信頼関係、協力関係をどのように築きあげていくの

か。今回は「信頼」に焦点をあてて論を進めていきたい。寺院、地域社会の活性化のため、重要となってくるキーワードとして「ソーシャル・キャピタル」があげられる。このソーシャル・キャピタルとは何であろうか。

ソーシャル・キャピタルとは、社会資本もしくは社会関係資本と訳され、（社会や他者への）信頼、互惠性の規範、ネットワークの総体を示す概念である。地域社会における経済活動、社会福祉や公共衛生、市民活動や政治参加、社会問題への取り組みへの意欲やパフォーマンス、効果を上げるためにソーシャル・キャピタルの形成や活性化が重要と考えられている。¹⁶

ソーシャル・キャピタル研究の第一人者のロバート・パットナムの言葉も見ていきたい。「社会関係資本が指し示しているのは個人人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」とパットナムは述べている。¹⁷

以上の説明から私なりにソーシャル・キャピタルを解釈すると、個人人間のつながりや社会的ネットワーク、つまりお互いの信頼だと解釈する。信頼は、寺院が中心となって地域社会を巻き込んで、寺院と地域社会を活性化させる上で必要不可欠なものである。この信頼は、寺院や地域社会のどのような影響を及ぼすのであろうか。片岡えみ氏は、信頼について次のように述べている。

信頼という価値は、社会的な協調行動や利他的行動を生み出し、人々を結びつけ、好循環なネットワークとして機能することを促進するものだ。信頼は見えないが、ネットワークの潤滑油であり、人々を相互に結び付ける重要な心的作用である。¹⁸

社会的な協調行動や利他的行動を生み出す価値がある信頼は、まさに仏教的な行動を起こすことができる要素であるといえるのではないだろうか。また、信頼はネットワークの潤滑油であることがうかがえる。これをお寺でたとえてみる。法要や年中行事など寺院に関わる活動は、寺族はもちろん門信徒の人々の支えがあつて行われているものである。

寺院に対して不信感や不安感がある人は、寺院の行事に参加しないであろうし、寺院や寺族に対しての信頼があつてこそ、寺院活動は執り行われているものだと考える。そしてこの信頼が増せば増すほど、門信徒の人々の寺院への帰属意識が高まってくると推察される。さらに、田舎という小さなコミュニティで生活をしてきた人々にとって地域の寺院は身近な存在であり、またそこに信頼が作用する力も大きく、帰属意識を高めやすいのではないだろうか。

第二節 信頼を生む「共にする」活動

ではどのようにして「信頼」を生み出していくのであろうか。先に結論を述べておくと、寺院と地域の「共にする」活動である。

浄土真宗本願寺派総合研究所教団総合研究室に所属する那須公昭氏は、二〇一三年に本願寺派滋賀教区を対象としたソーシャル・キャピタルの検証を行った。まず、寺院の護持費についてある。滋賀教区のとある地域では、ほとんどの寺院で寺院の年間の護持会費を門徒が管理していることがわかった。しかし、門徒が主体となって寺

院經理を担っていることは、全国的に稀であることが「第九回宗勢基本調査」において指摘されている。それでも、門徒自身によって寺院經理が行われていることは、寺院經理が「見える化」されている証明であるといえる。また、寺院総代や責任役員を決める方法は、選挙形式をとっている寺院が多かったことも調査でわかっているのである。¹⁹これらのことが、しだいに門信徒のあいだでその所属寺院に対する帰属意識を芽生えさせていると考えられる。

さらに、第一章で紹介した熊本大学名誉教授の徳野氏は、お寺はどう変わっていけば良いか次のように述べている。

過疎だ、過疎だと泣きごとを言っているが、お寺を身近に感じる世代である六十歳以上は一番人口が多い。こうした世代には、古里で余生を過ごしたいと思う人たちがたくさんいる。お寺という場所が葬式の間ではなく、その世代に身近で、現実に生きている人にどれだけ役立つか。そこが重要だ²⁰。

否定的な思考や視点を変え、寺院を老若男女問わず、誰でも入りやすい居場所、コミュニティスペースになるように、本堂などを開放することは必要になってくるであろう上に、これが寺院や地域社会を変え、活気づけることに繋がるのではないだろうか。さきほど取り上げた「共にする」という考えをふまえ、積極的に取り組みを寺院で行っている例を紹介したい。

広島県の江田島市能美町高田の浄土真宗本願寺派光源寺では、毎年春と秋に境内を開放し、住民たち有志による「えたじま手づくり市」が開かれている。この手づくり市は二〇一二年秋に島を活気づけたいと始められ、江

田島の中だけでなく広島市、呉市、尾道市などから公募で応じた店が開かれている。そこでは、手芸・工芸品、パンなど多彩な品々がお寺一帯に並び、劇や音楽演奏会など趣向を凝らした出し物も人気を博している市なのである。

「仏様にあいさつを」というお寺側からの願いから、出店者たちが本堂に向かって合掌、礼拝して始まる。また、光源寺では毎月二回寺子屋として寺院を開放しており、寺子屋に通う小学生でつくる「光源寺寺子屋劇団」による劇も手づくり市で上演されており、一人一人の尊さや、助け合う大切さを問いかけている。出し物の間には海谷真之住職の法話といった、お寺ならではのことも行われている。この寺院の住職である海谷師は「境内から瀬戸内海を見渡し、のどかな雰囲気を楽しんでもらえる」といわれ、この手づくり市を「都市部から来られた方に島の魅力をアピールできる、島のお寺ならではの取り組み」ととらえ、交流の場としての縁の広がりを願っている。²¹

このような取り組みこそ、過疎地域やその寺院で行われるべきではないかと思う。食べ物や工芸品といった品々、劇や音楽会といった出し物であれば、老若男女を問わず参加でき、その土地の工芸品や手芸といった品々を求めて、都市部やその他の地域からの人呼び込むことができる。手づくり市が合掌と礼拝で始まることや住職の法話、寺子屋に通う子どもたちによる命や人との触れ合いの大切さをコンセプトとした劇など、仏教に関する行事も行われている。

今回の手づくり市でいえば、「お寺×市」や「仏教×劇」というように、仏教に関する要素をまた別の何かと

掛け合わせることで、普段とは違う形で気軽に、仏教に触れることのできる機会になっている。また、お寺に対して暗い、怖いといったイメージを持っているということをしばしば聞くが、この光源寺は瀬戸内海を見渡すことができる立地条件もあり、お寺へのネガティブなイメージを払拭し、のどかな時間と空間を楽しむことができるのではないだろうか。

さらに、この手作り市に対しては、次のような言葉もある。子どもの頃、光源寺の日曜学校に通っていた主婦は、「結婚して古里を離れて二十年近いが、こうした行事があるとお寺に行きやすい。懐かしい顔に『お帰り』と言ってもらえる場がありがたい。これからも長く続けてほしい」と言い、この手づくり市に期待している。²²

都市部への若者の移住は、田舎や過疎地域の進学先や働き先を考えると仕方のないことなのかもしれない。それでも、寺院が中心となって地域社会を盛り上げようと活動していくことは、地域の活性化はもちろん、移住した人が地元に戻省してきたときに、心を落ち着けることのできる場を作ることにつながる。繋がると考えられ先ほどの主婦の「懐かしい顔に『お帰り』と言ってもらえる場がありがたい」というのは、まさにそうではないだろうか。このような居場所作りは、地域社会に密接に関わりながら活動を行ってきた寺院だからこそできることだと考える。

以上のことから、寺院を老若男女問わず、誰でも入りやすい居場所・地域のコミュニティスペースとし、寺院だからこそできることに目を向けていくべきではないだろうか。

第三節 宗教の必要性と僧侶のあり方

次に仏教の必要性と、寺院・僧侶に対して厳しい目が向けられている中で寺院・僧侶はどうあるべきかを考えていきたい。

まず、宗教の必要性についてである。この世の中には苦しみが溢れている。私たちが苦しみに直面し、苦しみを抱えているときに、私たちの心の支えとなったり、人生の道しるべになったりしてくれるものが宗教であると考えている。阿満利麿氏は現代人の考え方を次のように述べている。

現代人にとって「科学」的であることが、なにごとであれ、「納得」するための条件なのです。それは強迫観念といってよいほどに根強い要求なのです。現代人にとっては、非科学的だといわれるほど、侮辱的なこととはな23いのです。

確かに、私たちは目に見えるものや実験で立証されたものを信じようとする。しかし、私たちが抱える苦しみは、科学で証明したり解決したりできないのである。死について例にあげて考えてみたい。死後、「すべて無になる」と考える人もいれば、「天国や地獄に行く」と考える人もいる。しかし、死後の世界や死んでから自分がどうなるのかということ24は、科学はもちろん人間が証明することはできない。さらに、阿満氏は次のように述べている。

科学的だから「納得」し、非科学的だから「納得」しないというだけでは、人間の精神は衰えていく一方だということ25です。死後の世界や死について、科学的常識だけをたよりに「納得」しようとする態度は、一見

分かりやすいようですが、底の浅い理解でしかなく、危機に面したとき、本当に役に立つことができないのです。²⁴

阿満氏の言うように、科学的なものの見方ばかりしては、いざ死や孤独に直面したときに、私たちの考えで解決することはできず、大きな苦しみを感じるであろう。そのようなときにこそ、宗教が私たちの心の寄りどころとなると考えられる。

そして、宗教者はその宗教がどういったものであるのかを伝え、人々に寄り添うことが役割であると考えている。しかし、第一章の第二節で取り上げたように、僧侶、寺院が社会の期待に応えられておらず、僧侶の態度が周囲の人々に不快感、不信感を与えている現状がある。結果、寺院を地域社会から孤立させ、遠ざけることとなり、宗教離れを加速させていると推察される。では、僧侶はどうあるべきなのか、浄土真宗本願寺派宗法から考えていきたい。

僧侶は、仏祖に奉仕して、自行化他に専念し、この宗門及び本山、所属の寺院又は職務に従事する寺院の護持発展に努めなければならない。²⁵

- 一 終身僧侶の本分を守り、勉学布教を怠らないこと。
- 二 和合を旨とし、宗門の秩序をみださないこと。
- 三 仏恩報謝の生活を送り、心豊かな社会の実現に貢献すること。²⁶

以上のように、浄土真宗本願寺派宗法の第二十条第二項に僧侶の任務が、第二十二条には三つの得度誓約つま

り僧侶の心得が明記されている。今一度、僧侶とはどうあるべきか考え直すべきであり、「上から目線」「お坊様の言動」「人格的に尊敬できない」「近づきがたい」「社会性、社会常識、マナー」「の欠如」という意見が出ていることから、一人の人間としても仏教や門信徒との向き合い方を考え直すべきではないだろうか。

第三章 寺院解散・寺院合併になった時

前章では、少子高齢社会、地方の過疎状態の日本で寺院運営を行う僧侶や門信徒、寺院について取り上げ、寺院や地域社会を活性化させるためにはどのような要素が必要か、寺院や寺族には何が求められているのかを考えてきた。しかし、この少子高齢社会や地方の過疎化といった社会情勢そのものを僧侶や門信徒、寺院の力で食い止めたり、変えたりすることは残念ながらできない。

そういった厳しい状況の中でどうすることもできなくなり、廃寺または合併の選択を取らざるを得ない状況になる寺院が、今後続々と出てくるであろう。そのような中で、廃寺手続きを行う人や門信徒の人たちの不安、負担を少しでも軽くすることはできないだろうか。本章では、廃寺を行う際に生じる問題点、そして問題点を克服する方法について考えていきたい。

改めて、過疎地域で厳しい運営状態にある寺院の状況について確認しておきたい。浄土真宗本願寺派総合研究所の坂原英見氏は著作において、四つの廃寺・兼務化の例を取り上げており、それらの例で共通した廃寺・兼務

化の要因としてつぎの四つをあげている。

- ・ 過疎、後継者不在
- ・ 門徒より信徒・化境のほうが多い、化境（他の寺院の門徒で護持に協力する家）の問題点
- ・ 経済的負担、伽藍の維持と宗派への負担金など
- ・ 門信徒の行く末、隣寺への所属について²⁷

本章では、この四つの要因についてを主として以下検討していきたい。

第一節 廃寺がもたらすもの

では、坂原氏が取り上げた一つの廃寺の例について見ていきたい。

A寺は過疎地で、集落から一キロ近く離れ、山中に存在していた。お寺の歴史も古く500年に及び、住職は有名な布教使で優れた法話を行い戦前から熱心に教化されていた。また、お寺を皆さんに開放し、本棚の本は自由に読み、借りることもできる。婦人会、青年会を中心となつて行い、日曜学校、子ども会、寺報などの活動も活発に行っていた。門徒はほぼ50戸で、さらに他寺院の門徒であるが普段のお参りをA寺に依頼する「信徒」と呼ばれる家が推定100戸以上あった。

坂原氏の地方では一種の地域割のように、他の寺院の門徒も地元のお寺に普段の法要を依頼したり法座に参り寄付も行う。他の地域にある本来の所属寺と併せ二ヶ寺とつきあう家が伝統的にある。住職夫婦には継承者がお

らず、養子を迎えることが決まっていたが破談になってしまい、その後も養子が決まらなかった。車で一時間離れたA寺の親族が住職代務を務めることになり法要を行い、門信徒が法座を維持していたが、遠距離であることから住職代務を退き、代務者もその後数名変わった。門信徒にとってはお参りのたびに相手が異なるといった混乱が生じ、ついに別の隣寺が一旦住職の兼務を受け、その上で寺院を解散した。最後の廃寺の直接の要因は宗派などへの負担金の支払いであった。誰も寺院を訪れず、伽藍は屋根が落ち、動物が棲み、破壊がひどい状態である。²⁸

先ほど紹介した坂原氏の指摘する四つの廃寺・兼務化の要因と併せて、この廃寺の例を見ていきたい。まず、廃寺の可能性が出たきっかけとなったのは後継者が決まらないことであった。さらに、過疎地で集落から離れた山中という立地条件から、代務者も定まらなかった。寺院活動を行っていくため最も重要な存在である住職が定まらないことは、門信徒にとって「これから私たち門信徒との関係や寺院運営はどうなっていくのだろう」と、自分たちと寺院の行く末について大きな不安を与えたと推察される。最終的には、寺院に対しての不信感や不安感が募り、寺院が山中にあったこともあり、門信徒が心理的・物理的に寺院から離れてしまうことになってしまったのではないだろうか。

A寺の例で述べたが坂原氏の地元地域では、信徒または化境と呼ばれる、自身が所属している寺院とはまた別に、地元の寺院に法要を依頼したり法座に参加したり、寄付を行ったりする門信徒が存在しているという。この地域では二ヶ所以上の寺院と関係を持つ門信徒がいることがごく普通で、むしろ一ヶ所の寺院だけと関わる門信

徒が少なく、「ウチのお寺」といった帰属意識を持つことが難しくなっていたと考えられ、坂原氏も同様にこのことを指摘している。

A寺の廃寺の直接的な要因は、宗派への負担金といった経済的負担であった。門信徒は過疎地域で暮らす自身の生活が苦しいことも考えられるが、これまで述べてきた「門信徒が心理的・物理的に寺院から離れてしまったこと」「複数の寺院との関わりを持った中での寺院への帰属意識の低下」が関係しており、寺院への信頼がなくなってしまうことから、「この寺院に寄付することはできない」と門信徒に思われてしまったのではないだろうか。

結果、寺院と地域社会の信頼関係も荒廃し、人々は寺院を訪れなくなり、伽藍の破壊などといった寺院そのものが荒廃してしまったことは大変残念である。

第二節 心の過疎を生まないために

第一節で取り上げた過疎地域における寺院の解散の例では、寺院に対しての不信感や不安感が募った結果、寺院そのもの荒廃と門信徒との信頼関係の崩壊をもたらしてしまった。信頼感や地域づくりの意欲の沈滞などを坂原氏は、「心の過疎化」と表現している。²⁹第二章の第一節でも述べたように、「信頼」は社会的な協調行動や利他的行動を生み出す価値があるものである。

つまり、信頼がなくなってしまうえば、「みんなで」「誰かのために」といった行動ができなくなってしまうの

である。これは人々の関係を悪化させるばかりであり、好循環なネットワークを生むことはできない。最悪、ネットワーク（地域社会）の崩壊を引き起こす危険性がある。では、寺院解散・寺院合併を行うことになったとき、寺院と地域社会の荒廃を免れるため、心の過疎を生まないようにするには、どのようにするべきであろうか考えていきたい。

まず、早期にSOSを門信徒や隣寺に発信し、協力を求めることが必要であると考えられる。第一章、第二章でも述べてきたように、寺院活動は寺族だけではなく、門信徒や地域住民の人々の支えがあつて行われているのである。

門信徒や地域社会あつてこそその寺院である。寺族だけで廃寺問題に対して取り組んでも大きな影響力にはならない。門信徒や地域社会との「信頼」を常に念頭に置き、「みんなで」「寺院、門信徒のために」「地域社会のために」という思いを持って廃寺問題と向き合うことで大きな影響を及ぼすのではないだろうか。坂原氏も次のように述べている。

寺族として内側からの努力は大きくても、廃寺を決定するほどの困難な要因に対しては有効ではない。門信徒や近隣の寺の協力を早期に仰ぎ、混乱をできるだけ少なく行こうしていくことが廃寺から荒廃へのプロセスを防ぐために大切なことであると思う。³⁰

やはり、対応が遅くなればなるほど混乱を大きくすると予想される。「後継者がいない」「寺院の行く末はどうなるのだろうか」といった懸念が出てから、「廃寺にするか・存続するか」という決断に迫られることになる

まで、あつという間であろう。

このような状況に直面する中で、先手先手で行動を起こし、短期間に様々な決断をしなければならぬ。また、隣寺に頼ることも大切な要素になってくるであろう。先ほど述べたように、門信徒や地域住民と共に廃寺問題に考えていくことは、廃寺から荒廃を防ぐために必要であるが、寺族にしかできないこと・寺族にしか分からないことも多くあるだろう。

また、廃寺問題の渦中にある寺院や門信徒は、冷静な判断や客観的な視点を失ってしまうことが予想される。そのような時に廃寺問題に対応していく上で、隣寺が廃寺問題に直面している寺院やその門信徒を客観的な目線から支援ができるのではないのだろうか。そして、寺院同士のネットワークから後継者探しや代務者探しが円滑に行うことができるのではないか。

結論

厳しい状態におかれている寺院の状況をうかがうなかで、一九六〇年頃からの急速な社会の変化に寺院がついて行けておらず、取り残されていることを感じさせられた。少子高齢化や過疎化といった社会情勢や変化そのものに、寺院の力で対抗することはできない。だからといって、今の状況に嘆いてばかりであったり、仕方ないの

ひと言で片付けたりしてしまうことは、大変残念なことである。そして、何も行動を起こすことがなければ、門信徒や地域住民は心理的にも物理的にも、寺院との距離が大きくなっていくばかりで、門信徒や地域社会に支えられてこそ成り立っている寺院は、荒廃していく一方である。

少しでも視点や考え方、価値観を変えて、過疎問題や廃寺問題に向き合わなければならぬ。寺院だからこそできることを考え、これまで寺院を支えてきてくださった「門信徒や地域住民のために」、今度は僧侶や寺院ができることや情報を発信することを行っていく必要がある。具体的には、門信徒や地域住民が安心して生きることができ、安心して生涯を終えることができるような取り組みを門信徒や地域住民と「共に」つくり上げ、行っていくことが、「信頼」を生み、寺院や地域社会を活性化させることができるのではないだろうか。

第二章で取り上げたような、「仏教×〇〇」といった風に、「〇〇」には普段寺院を訪れることや仏教に触れる機会が少なかった、あるいは無かったという人々にとってもなじみ深い要素にすることで、門信徒や地域住民はもちろん遠方の人々も寺院を訪れるきっかけになり、気軽に仏教に触れる機会になるであろう。もちろん、教化や布教といったことも大切であるが、第二章で触れたように、「お寺という場所が葬式の間ではなく、その世代に身近で、現実に生きている人にどれだけ役立つか」が、寺院と僧侶が変わっていくためのヒントになるであろう。

今後、少子高齢化や過疎化が進むなかで廃寺問題に直面する寺院がますます出てくるであろう。そうなってしまった場合、門信徒や近隣の寺院といった多くの人々に早急に助けを求めることが必要だと考える。混乱を最小

限にとどめ、門信徒や隣寺とのネットワークを強固なものにしていくために大きな力になるはずだ。

そして、宗教は私たちが苦しみに直面し、苦しみを抱えているときに、私たちの心の支えとなったり、人生の道しるべになったりしてくれるものである。そして、寺院は苦しみを抱える人々を受け入れる場所であり、宗教者はその宗教がどういったものであるのかを伝え、苦しみを抱える人々に寄り添うことが役割であると考えている。寺院が、門信徒や地域住民の生活にとってのよりどころとなるためには、「仏教とは何か」「寺院・僧侶とは何か」「寺院が、門信徒や地域住民のために何ができるか」ということに向き合い続けなければならない。

コピー

禁止

- 1 鵜飼秀徳『寺院消滅…失われる「地方」と「宗教」』六頁
- 2 「データで見る社会の課題」（公務労協・公共サービス）<https://www.komu-rokkyo.jp/campaign/data/index.html> 2019年11月アクセス
- 3 「平成二七年国勢調査―人口・世帯数（速報値）を公表―」<https://www.stat.go.jp/info/today/106.html> 2019年11月アクセス
- 4 『宗報…二〇一八年三月号』四四頁～四七頁
- 5 鵜飼秀徳『寺院消滅…失われる「地方」と「宗教」』七頁
- 6 「人口推計」（総務省統計局）<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html> 2019年12月アクセス
- 7 「人口推計」（総務省統計局）<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2009np/index.html> 2019年12月アクセス
- 8 『デジタル大辞泉』<https://japanknowledge.com/lib/display/?hid=2001003288600> 2019年12月アクセス
- 9 「過疎地域・過疎対策の状況について」（総務省地域力創造グループ過疎対策室）
https://www.soumu.go.jp/main_content/000448825.pdf 2019年11月アクセス
- 10 『宗報…二〇一一年八月号』一二頁～一四頁
- 11 『宗報…二〇一一年八月号』一七頁～一八頁
- 12 櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』九七頁

13	櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』九七頁
14	桜井邦彦『人口減少寺院の底力…地方紙記者のインパクトルポ』六一頁
15	桜井邦彦『人口減少寺院の底力…地方紙記者のインパクトルポ』六一頁、六二頁
16	櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』三〇頁
17	ロバート・パットナム『孤独なボウリング…米国コミュニティの崩壊と再生』一四頁
18	片岡えみ「信頼感とソーシャル・キャピタル、寛容性」一三七頁
19	櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』一〇五頁～一〇六頁
20	桜井邦彦『人口減少寺院の底力…地方紙記者のインパクトルポ』六二頁
21	桜井邦彦『人口減少寺院の底力…地方紙記者のインパクトルポ』一五五頁～一五八頁
22	桜井邦彦『人口減少寺院の底力…地方紙記者のインパクトルポ』一五八頁
23	阿満利磨『人はなぜ宗教を必要とするのか』二七頁
24	阿満利磨『人はなぜ宗教を必要とするのか』二八頁
25	所務部編『浄土真宗本願寺派宗門基本法規集』八頁
26	所務部編『浄土真宗本願寺派宗門基本法規集』八頁
27	櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』三二一頁～三二二頁
28	櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』三一四頁～三一五頁

櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソシヤル・キャピタルの視座から』三二五頁

櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院…ソシヤル・キャピタルの視座から』三二一頁

コピー厳禁

参考文献

書籍の部

- 阿満利磨 『人はなぜ宗教を必要とするのか』ちくま新書、一九九九年
- 稲場圭信、櫻井義秀編 『社会貢献する宗教』世界思想社、二〇〇九年
- 上田紀行 『がんばれ仏教…お寺ルネサンスの時代』日本放送出版協会、二〇〇四年
- 鶉飼秀徳 『寺院消滅…失われる「地方」と「宗教」』日経BP社、二〇一五年
- 桜井邦彦 『人口減少寺院の底力…地方紙記者のインパクトルポ』興山舎、二〇一八年
- 櫻井義秀、川又俊則編 『人口減少社会と寺院…ソーシャル・キャピタルの視座から』法藏館、二〇一六年
- 櫻井義秀、濱田陽編著 『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店、二〇一二年
- 所務部編 『浄土真宗本願寺派宗門基本法規集』本願寺出版社、二〇一七年
- 高橋卓志 『寺よ、変われ』岩波書店、二〇〇九年
- 松本紹圭、井出悦郎 『お寺の教科書…未来の住職塾が開く、これからのお寺の一〇〇年』徳間書店、二〇一三年

論文の部

片岡えみ 「信頼感とソーシャル・キャピタル、寛容性」二〇一四年

西央成 「地域社会と寺院をつなぐために教団が担う中間支援機能のあり方の考察…NPOに対する支援組織と比較して」二〇一七年

コピー厳禁